【大聖寺藩の歴史～その１～】

「幕末の大名石高表」によると、廃藩置県直前の 1871（明治４）年に、わが国にあった藩は全部で 270 藩前後。その中で、大聖寺藩十万石は、何と表高（幕府が認定していた石高）で 53 番目、実高（実際にとれた石高）で 70 番目で、270 前後あった藩の中でも、上位ランクだったのです。わたしたちは、お隣の金沢藩が 103 万石もあるので、大聖寺藩って小さい藩だってイメージがありますが、大聖寺藩は、実は日本を代表するほど大きな藩だったでした。

同規模の藩でいうと、小田原（現人口 19.5 万人）、弘前（同 18.1 万人）、富山（同 42.1 万人）、大垣（同 16.1 万人）、高崎（同 37.2 万人）です。全国にあった藩のほとんどが、３万石以下の小藩だったといいますから、大聖寺ってすごかったんです。

関ヶ原の戦いがあった 1600（慶長５）年から 1871（明治４）年までの間には、527 の藩が存在しました。すなわちそれは、527 の城下町があったということです。そのうち、廃藩となったのが、247 藩。ですから、江戸時代にあった藩のうち、最後まで生き残ることができた藩は、半分しかなかったことになります。大聖寺藩って、いろんな苦難を抱えながらも、どっこい最後まで生き残った藩なのです。

（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座　「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その２～】

「大聖寺藩士は江戸時代『松飛様御家中』と呼ばれていた!!」

わたしたちが「大聖寺藩」、「前田藩」、「薩摩藩」、「長州藩」なんていうぐあいに、当たり前に使っている「藩」という言葉は、江戸時代には全く使ってなかったのだそうです。ですから、江戸時代に大聖寺に住んでいた人々は、「大聖寺藩」とか「前田藩」という言い方を一切していなかったのです。

「藩」が行政区分の呼び名として使われるようになったのは、実は明治時代になってからだそうです。1868（明治２）年に明治新政府が没収した土地のことを、大名の住んでいた所の地名をもって「××藩」と呼ぶようになったのが、そのはじまりです。

←大聖寺の陣屋があった現錦城小学校

それでは、江戸時代まで、「大聖寺藩」のことは何と呼ばれていたのでしょうか？大聖寺藩の初代藩主利治（としはる）の父は、金沢藩三代藩主利常で、母は珠姫です。そして母の珠姫は二代将軍徳川秀忠の娘ですから、利治は将軍秀忠の孫なのです。

その関係から前田家には「松平」の姓が授けられていました。ですので、江戸時代の人々は、大聖寺の殿様を「前田」ではなく、「松平」の殿様と思っていました。また当時は大名の名前を呼ぶ場合、姓と「官名（受領名）」がセットで使われていました。「官名（受領名）」とは、朝廷が幕府を通じて大名に与えていたもので、大聖寺前田家は歴代「飛騨守（ひだのかみ）」や「備後守（びんごのかみ）」を授かることが多かったようです。（従四位下に相当する官名だそうです。）そのことから、ふつう大聖寺藩の歴代藩主は、松平の一字「松」と飛騨守の一字「飛」を合わせて、「松飛様」と呼ばれていました。また、大聖寺藩士たちは、「松飛様御家中（まつひさまごかちゅう）」といわれたのです。（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座 「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その３～】

城下町・大聖寺の基礎を築いた溝口秀勝

大聖寺という名前が初めて歴史にあらわれるのは、1163（長寛元）年にできた『白山之記』という本です。白山五院の一つとして「大聖寺」というお寺の名前が書かれています。このお寺は、たぶん錦城山の上にあっただろうと考えられています。

大聖寺で起こった出来事が明らかになるのが、多くの侍たちが誕生し、全国を舞台に活躍する南北朝時代以降です。『太平記』には、1335（建武２）年に敷地方天神の神官狩野氏を中心とした郷党が、錦城山にあった大聖寺城で北条氏の残党である名越（なごや）太郎時兼を破ったことや、２年後の 1337（延元２）年に南朝方の畑時能（ときよし）が狩野方を味方として、荻生山の津葉城を攻めて大勝利をあげたことなどが記録されています。ちなみに、畑時能という人は『太平記』に日本一の大力の剛の者と書かれている人で、忠犬”犬獅子”を従えて活躍したそうです。

さて、城下町大聖寺の基礎を作り上げたのは、前田家だったように思われがちですが、実はそうではなく、溝口秀勝（1548～1610 年）という人です。溝口秀勝は、尾張国中島郡西溝口村出身で、織田信長の家臣・丹羽長秀に仕えて武功をたて、1581 年に長秀の与力大名として若狭国高浜城主となり、５千石を与えられました。1583（天正 11）年の賤ケ岳の戦いでは、敦賀にあった羽

柴秀吉軍に味方して、柴田勝家を破るために大活躍しました。溝口秀勝はその功績により、1584（天正 12）年８月に大聖寺城主となり、４万４千石を与えられました。また翌年には、主君の丹羽長秀が病没したことを受け、独立した一大名となりました。

溝口秀勝はその後 15 年の長きにわたって、大聖寺を治めましたが、とっても忙しかったようです。1587（天正 15）年には、７００人の兵を率いて秀吉の九州島津征伐に従軍、1590（天正 18）年には、秀吉の小田原北条攻めに北陸軍団の第一線部隊として従軍しています。さらに、1592（文禄元）年から 1598（慶長３年）まで続いた秀吉の朝鮮出兵のさいには、肥前名護屋の本営勤務を果たしました。このほかにも、大坂城の普請手伝い、京都東山の大仏殿造営の手伝いなど、溝口秀勝は従軍と普請手伝いに明け暮れたようです。

1598（慶長３年）４月、溝口秀勝は越後の新発田藩６万石に移封され、初代藩主になります。６万石といわれて新発田に乗り込んだ秀勝は、領地の大半があばれ川である阿賀野川がつくる湿地帯だったので頭を抱えたという話です。しかし、秀勝は同じく湿地帯である大聖寺での経験を生かして治水・排水・新田開発に努めたといいます。溝口秀勝はその経歴をみると、土木や建築に長けた人物だったのでしょうね。城下町大聖寺の街並みには、溝口秀勝の頃の歴史がしっかりと刻まれているのです。（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座 「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その４～】

山口玄蕃・大聖寺がこよなく愛す悲劇の城主

今日は大聖寺の人々が今でもこよなく愛している元大聖寺城主のお話しです。

その人の名は、山口玄蕃宗永（げんばむねなが、1545～1600 年）です。大聖寺には、「げんば通り」、「げんば堂」、「玄蕃供養祭」など山口玄蕃ゆかりのものがたくさんあります。関ヶ原の戦いの前哨戦といわれる「大聖寺城のたたかい」で非業の最期を遂げた山口玄蕃に対する大聖寺町民の親しみがよくわかります。

←山口玄蕃の首塚

山口玄蕃は豊臣秀吉に才を認められ、一時小早川家の筆頭家老として小早川秀秋（秀吉のおい秀俊）に仕えていました。そして秀秋の越前・加賀南部（江沼・能美）への転封にともない、大聖

寺にやってきたのでした。その後小早川秀秋は旧領に帰りますが、山口玄蕃は秀吉の直臣に戻り、1598（慶長３）年４月、大聖寺領主として江沼郡７万石を支配することになったのです。

その年の９月 18 日、豊臣秀吉が亡くなりました。日本は石田三成方（西軍）と徳川家康方（東軍）へと分かれ、天下分け目の決戦となる関ヶ原の戦い（西暦 1600 年 10 月 21 日）へとなだれこみます。山口玄蕃は豊臣家への恩義から三成につきます。一方、金沢の前田利長は家康につくことになりました。いよいよ関ヶ原の戦いがはじまる直前です。1600 年 7 月 26 日に前田利長は約 2 万の大軍を率いて金沢城を出ます。当初、玄蕃と同じ西軍の丹羽長重がいる小松城を攻撃するかに見えましたが、利長は戦上手で知られる丹羽長重を避けて、8 月 1 日に加賀の松山城に入城します。

玄蕃は知らせを聞いて大聖寺城の防備を固め、小松城の丹羽長重や近隣の西軍方の仲間に救援依頼の使者を派遣しましたが、間に合いませんでした。翌 2 日、利長は使者を送って玄蕃に降伏を勧告しました。しかし彼は利長の攻撃に憤激して勧告を拒否したのでした。その後和睦を図る動きもあったのですが、ついに「大聖寺城の戦い」がはじまります。

←大聖寺城跡がある錦城山

大聖寺城に立てこもる山口玄蕃勢はわずか 500 余人。それに対して前田利長勢は何十倍もの大軍です。前田勢は後続の軍勢もぞくぞく参戦して、2 昼夜にわたり、城の外周で激戦が展開されました。山口玄蕃の長男修弘は果敢に出撃して、前田勢に被害を与えましたが、前田勢の鉄砲隊の一斉射撃を受けて、やむなく城内に退却します。前田勢の猛攻撃に対し、玄蕃父子が率いる軍勢もひるまず反撃しますが、数の差はいかんともしがたく、ついに玄蕃は塀の上から降伏の意思を伝えました。

しかし、800 人もの戦死者が出た前田勢は復讐に燃え、これを許さず、城内に突入します。8 月 3 日の夕方、大聖寺城は陥落、山口玄蕃・修弘父子は福田橋のたもとで自害を果たしていきます。山口玄蕃宗永と長男修弘の墓は大聖寺の全昌寺にあります。また次男の弘定は父の遺志を継いで大坂城に入城し、大坂の役で戦うことになったのでした。（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座 「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その５～】

大聖寺藩の新田開発と正徳の大一揆

大聖寺藩は 1639（寛永１６）年６月に初代藩主前田利治によって立てられました。立藩当初は７万石、1821（文政４）年、9 代藩主利之（としこれ）の時に 10 万石に高直しされました。そして 1871（明治４）年、14 代藩主利鬯（としか）の時に廃藩置県でなくなるまで、230 年以上にわたってこの地域を治めました。

江戸時代の日本は農業国家です。大聖寺藩の約 230 年間はいかにたくさんお米を作るかが、藩にとっての最大の課題でした。ですから、少しでも米の生産量を増やすために、新しい田んぼづくり（新田開発）に力が注がれました。

加賀市の里山の山すそは、そのほとんどが「ストン」と切れ落ちているそうです。それは、切添新田といって、大聖寺藩が少しでも水田を増やすために開発をしていた証拠です。また、市ノ瀬用水や矢田野用水がつくられて、それまで荒れ野だったところが、次々と水田に生まれ変わっていきました。特に、矢田野用水は、ときの家老神谷内膳が、1673（延宝７）年１１月に、自ら矢田野に引越し、総延長 11.1㎞ の難工事をわずか６ヶ月で成し遂げたことで知られています。この矢田野用水は、いまの横北町の動橋川から取水し、法皇山の下をトンネルで抜け、宇谷川を水路橋（28.8m）で渡り、那谷川の下をサイフォンで潜っています。そして難所といわれた「小手ヶ谷」を通過して、分校・箱宮の境に 89mのトンネルを作って、二ツ梨・矢田野へたどりつかせるものでした。

しかし、このように苦労して完成した用水も、1675（延宝９）年６月の田植えの後、難所「小手ヶ谷」が陥没し、昼夜兼行で改修作業にあたらなければなりませんでした。この時、多くの犠牲者が出たといわれます。地元では、毎年蒸し暑い日の日没頃、どこからともなく何億という白い蝶があらわれて、夜明けになると力尽きて川面を埋めつくしたというお話しが残っています。それは、その工事で亡くなった人の霊であると言われました。

←現錦城小学校に場所に大聖寺の陣屋がありました。

大聖寺町の周辺部は、今でも地方（じかた）町と呼ばれていますが、これは大聖寺の町人の資本で新たに開発された水田があった所です。財政が苦しかった大聖寺藩では、新田開発も町人の力を頼る必要がありました。今の大聖寺東町（加賀体育館周辺）は、大聖寺山田町の町人が、そして今の大聖寺西町や西栄町などは、大聖寺本町や京町にいた町人の力で開発されたそうです。大

聖寺東町周辺は、三谷川の氾濫原だったところで、何万本もの松くいが打たれて、やっと田んぼができたそうです。

これらの新田開発によって、大聖寺藩は実高（実際にとれるお米の量）が８万石になったのですが、江戸幕府から申しつけられるお手伝い普請や天災によって、慢性的な赤字に陥っていたようです。

1712（ 正徳 2）年には、大聖寺藩全域で北陸最大級の一揆、正徳の大一揆（全藩一揆）が起こっています。この年台風や塩害の影響で米が不作だったにもかかわらず、大聖寺藩が年貢の減免を認めなかったことから起こった一揆です。大聖寺藩は、財政難から、年貢の取り立てが厳しい藩だったようです。この一揆は、15 歳から 65 歳までの男は 1 人残らず、しかも肝煎（きもいり、名主）などの村役人から水呑百姓・下人（げにん）にいたるまで、十村以外のすべての農民諸階層が参加した惣（そう）百姓一揆の典型として、日本の歴史においても特筆されるものだそうです。（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座 「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その６～】

大聖寺･どんどん膨れ上がった城下町

みなさん、江戸時代の大聖寺城下町に一体どれぐらいの町人が住んでいたかご存じですか？残念ながら当時の戸籍のようなものは残っていないので、人口は不明です。しかし、1786（天明６）年にあった町方の戸数が 865 軒、そして 86 年後の 1872（明治５）年に大聖寺全体の戸数が 2,058 軒あったことが分かっています。1872 年の軒数には武家の戸数も含まれていますので、幕末の時点では町人の家はざっと 1,000～1,500 軒程度であったと考えられます。ですから、江戸中期から後期にかけて、大聖寺城下町には周辺の農村からとっても多くの人々が流入し、大聖寺の人口が急増し、町の数がどんどん増えていったことが分かります。そして農村からやってきた人々が城下町の町末に居住し、下層民として大聖寺を支えていた様子が感じ取れます。

大聖寺に最初にできた町人の町は、いまの京町でした。京町は山口玄蕃が統治した時代に、都から招かれた町人たちが核になってできたものです。そして本町や最初は旅籠町といわれた山田町にも有力商人が住んでいました。また、文字通り片側は荒地だった片原町、紺屋町といわれた寺町、鍛冶職人が集住してできた鍛冶町、親方層と職人達が混住していた福田町などもできました。

その他にも魚類の振売商人が集住した魚町や当初は町名を持たなかった町並に、中町、関町、下新町（いまの荒町）、木挽・大工が住む五軒町という町ができていきました。財政難であった大聖寺藩にとって、大きな収入源となった商品作物は、茶・絹・紙の３つでした。

このような産物をもとに町の商人たちが納める運上銀は藩にとって大変重要なものだったのです。元禄期以降、武家社会が充実してくると、武家の奉公人である小者・草履取・中間と呼ばれる人々が不足がちとなり、農村から１年契約で奉公人を雇い入れるようになります。農民にとって、武家での奉公は大変な仕事でしたが、ご飯が食べられ、少ないながらも給金がもらえるので、農業に比べればはるかに楽なものでした。そこで武家に奉公する農民が増えていきます。そして年季が明けると農村に帰ることなく、今度は町屋に奉公し、そこから才覚次第で給金を貯めて商人になったり、あるいは地子町に家を建てて城下町の町人となる者も続出しました。このような小商人、職人の居住する地が、魚町の南側や荒町（下新町）の末端、越前町、大聖寺川を越えた道路沿いの敷地や新町、相生町を築き、大聖寺の町は拡大していったようです。このような町は、農村から出てきた人が住みついた町なので、「在郷町」と呼ばれていたそうです。

大聖寺藩は、先進諸国で貨幣経済に転換しつつあった時代になっても、農民の年貢に頼ったしくみをとっていたので、農民の生活は困窮していたようです。そのことから、元禄期以降、農民の階層分化がすすんだこともあって、農民の大聖寺城下町への流入が増えていったようです。

村に残った農民たちも、都市向けの商品作物を作るようになります。また、山中村と山代村が温泉地として湯治客を集客したり、海に近い村では製塩、そのほかに真綿、蚕種を生産して利益を上げる村がでました。貨幣経済の浸透は大聖寺藩に大きな変化をもたらすことになったのです。（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座　「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その７～】

大聖寺藩の十村制度

大聖寺藩では、町奉行が大聖寺城下の町人たちを、郡（こおり）奉行が領内の村々に住む農民を支配していました。そして村々を支配するために、大聖寺藩では、加賀藩にならって「十村（とむら）制度」というしくみを採用していました。この「十村制度」は、地元の有力農民を「十村」として藩の味方につけ、農村全体を管理・監督し、年貢の収納をスムーズにするためにつくられた制度だそうです。

十村制度が導入された背景には、加賀前田家と加賀一向一揆との関係があるといいます。加賀藩の藩祖である前田利家は、織田信長の命を受けて加賀一向一揆を鎮圧しましたが、その際に門徒1000 人以上を虐殺したといわれます。そしてこの一揆に対する弾圧により加賀の労働人口が大幅に減少したため、加賀藩内では年貢の徴収がはかどらなかったようです。

一方、前田家は 100 万石を有する強大な外様大名であったため、江戸幕府から度重なるお手伝い普請や軍役を命ぜられ、その支出はかさむ一方でした。そのため徴税にあたる「給人」（家臣や代官）が、農民からきびしく年貢を取り立てようとしましたが、父祖を殺りくされた加賀の農民たちの怒りは増大し、捨て身のサボタージュや逃散が相次ぎました。

加賀藩はもしこれ以上農民を追いつめて、大規模な一揆でも起こったら、幕府に介入の糸口を与え、減封改易を受けることを免れない危機的な状況に追い込まれていたのでした。現に、３代藩主利常は、1631（寛永８）年から３年間、謀反の疑いをかけられ、江戸の上屋敷で軟禁されるなど、江戸幕府からにらまれていました。だから、利常は前田家のおかれた危うい立場をしっかり胸に刻みながら、藩政の安定化を図る必要がありました。

農政改革をすすめる利常は、加賀地方の農村部に一向一揆の際に組織された門徒指導者を中心とする社会秩序が江戸時代に入ってもしっかり機能していることに着目します。そして、思い切って農村の監督・徴税を農村の有力者に委ねることにしたのです。

この「十村制度」には３つのメリットがありました。まずは「農民にとってのメリット」です。徴税するのが仇敵である前田家の侍や役人ではなく、昔からよく顔を知る信頼あつい農民なので抵抗感が少なくなりました。２つめは「十村にとってのメリット」です。十村につくことで、自分の持っていた既得権を藩から公認された形となります。また扶持も与えられ、その権利は多くの場合世襲となって継承されました。

そして「藩にとってのメリット」です。万一、徴収が厳しく農民が不平を訴えたとしても十村は農民であるため、この制度により、農民同士の争いとして処理することが可能になったのです。

←小塩辻にある十村屋敷跡

大聖寺藩内の村々は、８行政区＝組（西ノ庄・北浜・潟端・能美境・那谷谷・四十九院谷・紙屋谷・奥山方）に分けられ、それぞれ十村が置かれました。十村は、郡奉行や改作奉行の下位、肝煎の上位に位置し、大聖寺藩の農政実務をおこなう上で、大きな役割を果たしました。（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座 「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その８～】

大聖寺藩の危機･3代藩主利直の時の出来事

大聖寺藩の体制は初代利治、２代利明の時期に築かれました。そしてその後を引き継いだのが利明の三男として江戸で生まれた利直（1672～1710）でした。利直は、1684（貞享元）年に５代将軍・徳川綱吉に御目見得して以降、綱吉の寵愛を受け、外様大名の立場にもかかわらず、1691（元禄４）年に奥詰に任じられ、生活のほとんどを江戸で送ることになった人です。

５代将軍・徳川綱吉は犬公方といわれ、「生類憐みの令」を発しました。利直が綱吉のお気に入りであったことから、大聖寺藩は 1695（元禄８）年に御手伝普請として、大久保・中野に犬小屋の建造を命じられることになります。その仕事は半端なものではなく、なんと、敷地 16 万坪の中野に、25 坪の朱塗りの犬小屋を 290 棟、7.5 坪の犬の日除場を 295 棟、子犬の養育所を 459 ヵ所も設置しなければならないものでした。この御手伝普請により、大聖寺藩はたちまち財政困難に陥っていきます。

また、利直がほとんど大聖寺に戻らない定府大名だったことから、藩政を家臣団に任せざるをえませんでした。利直は初代利治、２代利明のときの功臣・神谷守政よりも、若い村井主殿（とのも）を重用したために、藩内で「元禄騒動」とよばれる神谷派対村井派の権力闘争が起こってしまいます。背景には元禄バブルの中で生活に困った家臣団の不満があったと考えられています。

この騒動は、公金使い込みを理由とした村井主殿の切腹と神谷守政の子・守応の金沢召還で決着しますが、大聖寺の藩政は混乱をきわめました。さらに、利直が晩年の頃には、不幸な出来事が続きます。1709（宝永６）年、５代将軍綱吉が死去し、奥詰を解任されます。そして弟・利昌が「采女（うねめ）事件」というとんでもない刃傷事件を起こしてしまうのです。

利直は 1692（元禄５）年に父利明の後を継いだとき、弟の利昌（1684-1709）に１万石を分与して、支藩である大聖寺新田藩を作りました。この大聖寺新田藩は独自の藩庁などの行政機関も持たず、最初は荻生村の「采女屋敷」で、のちに新町の役所で１万石分の米の経理を行うようなものでした。

1709（宝永６）年２月 15 日、上野の寛永寺で綱吉の葬儀が行われました。このとき、利直の弟の利昌は中宮使饗応役を命じられましたが、同役の大准后使饗応役は犬猿の仲であった大和国柳本藩の織田秀親（織田信長の弟織田有楽齋の子孫）でした。翌 16 日に事件が起きます。利昌が寛永寺吉祥院の宿坊で秀親を刺したのです。秀親は即死だったそうです。凶行の前日、利昌は家臣に赤穂事件について感想を求め、家臣は「内匠頭は斬らずに刺せば本懐を遂げられた」と答えたという記録が残っています。

犯行後、利昌は女装して、現場から大聖寺上屋敷に逃げました。しかし事の重大さから宗家である金沢藩が幕府に通報し、利昌は山城国淀藩主石川義孝に預けられ、18 日には切腹となったのでした。その後、大聖寺新田藩は廃藩となり、幕府に一旦収公されますが、すぐに大聖寺藩に１万石は還付されました。不幸が続く中で、利直は 1710（宝永７）年 12 月 13 日に永眠します。

←利直も眠る実性院の大聖寺歴代藩主の墓

桜の咲く季節、また晩秋の紅葉の頃にとっても美しい長流亭は、この利直の休息所として 1709（宝永６）年に建造されたものです。（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座 「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その９～】

大聖寺藩・死んだ後、藩主になった 10 代利行（としみち）

不幸にして若い時になくなっている大聖寺藩主が多いことに驚くます。

←実性院にある大聖寺歴代藩主の墓

７代利物（としたね、1760～1788）29 歳、８代利孝（としやす、1779～1805）26 歳、10 代利極（としなか、1812～1838）27 歳、11 代利平（としひら、1823～1838）25 歳、12 代利義（としのり、1823～1855）23 歳、13 代利行（としみち、1835～1855）21 歳と、歴代 14 代の大聖寺藩主のうち、６人もの人が 20 歳代にして、その生涯を終えているのです。そしてその中の一人、第 13 代藩主前田利行は、何と亡くなった後で藩主に就いた人です。

利行は 1835（天保 6）年 7 月 26 日に、金沢藩 13 代藩主・前田斉泰の五男として金沢で生まれました。利行は 1855（安政 2）年 4 月 20 日に兄で大聖寺 12 代藩主であった利義（斉泰の三男）が 23 歳の若さで急死したため、その養子として跡を継ぐ準備をしていたのですが、その利行も正式に家督を継ぐ前の 5 月 18 日に金沢で病死してしまいます。こちらもまだ 21 歳の若さででした。

本来、家督を継ぐときには、前もって江戸幕府の将軍（その時の将軍は徳川家定でした）に御目見得しておくのが通例であったため、大聖寺藩も、宗家である金沢藩も改易（お取り潰し）になっては大変と、大慌てします。そこで苦肉の策として、「家督を継ぐ予定の利行が江戸に向かう途中病気になってしまったので、代わりに弟・桃之助（斉泰の七男）が挨拶をします」と言って、御目見得を終わらせます。そして、御目見得が終わった後、「実は、利行が結局病気が悪化して、江戸に行く途中死んでしまいました」と幕府に報告をして、急場をしのぐのです。

江戸幕府はうすうすこの事情を知っていたのでしょうが、大聖寺初代藩主前田利治の母が 2 代将軍秀忠の娘・珠姫であることや、利行の母（金沢藩 13 代藩主・前田斉泰の側室）が将軍家定の養女であったことから、特別に跡を継ぐことを許し、利行は正式に 13 代大聖寺藩主に就くことができたのです。

利行の亡骸はその年の 12 月 16 日に金沢を出発します。途中、松任・小松に宿泊しながら、18 日には大聖寺藩陣屋前を経由し、実性院に運ばれ、密葬が執り行われました。また本葬が翌年 1 月 28 日に執行されています。このようなことから、13 代藩主前田利行は、本当は死んでいたのですが、1855（安政２）年７月 12 日から 10 月 29 日までの 3 ヶ月間、大聖寺藩主を務めたことになっているのです。

14 代藩主には、弟桃之助が利行の末期養子として着任し、前田利鬯（としか）を名乗ります。そして、この前田利鬯が大聖寺藩最後の藩主となるのです。（2012 年度加賀市観光ボランティア大学第 15 回講座 「大聖寺藩いいとこつかみどり」における江沼地方史研究会・伊林永幸先生のご講演をもとにまとめました。）

【大聖寺藩の歴史～その 10～】

大聖寺･災害が忘れる前にやってきた江戸時代

←錦城山と白山

江戸時代の大聖寺には「天災は忘れる前にやってくる」と思えるくらい、次々と天災が襲いかかっていたことが分かります。そしてそれは「地震・雷・火事・おやじ」ではなく、「地震・洪水・火事・ききん」だったようです。

←大聖寺川

大聖寺では江戸時代に、資料にあるだけでも次のような災害が起こっています。

1640（寛永 16）年 10 月 10 日　大聖寺に大地震、町屋・人馬の被害拡大

1671（寛文 5）年　7 月　4 日　大聖寺川大洪水

1672（寛文 6）年　6 月　2 日　大聖寺川大洪水

1681（天和 元）年　7 月　　領内飢饉、この日までにの餓死者 2587 人

1701（元禄 14）年　8 月 18 日　大聖寺川大洪水

1707（宝永　4）年 10 月　4 日　金沢・大聖寺に大地震

1712（正徳 元）年 10 月　4 日　凶作のため、正徳の大一揆（～９日）

1723（享保　８）年　８月 10 日　大聖寺川大洪水

1729（享保 14）年　４月 29 日　大聖寺大火、400 軒余焼失

1758（宝暦　８）年　２月 20 日　大聖寺大火、200 軒余焼失

1760（宝暦 10）年　２月　７日　大聖寺大火、1252 軒焼失

1768（明和　5）年　５月 29 日　大聖寺川大洪水

1773（安永　２）年　７月 11 日　領内大洪水、田畑流失

1783（天明　３）年　７月 11 日　大聖寺川大洪水。大凶作、餓死者多数

1796（寛政　８）年　４月　６日　大聖寺火災、121 軒焼失

1799（寛政 11）年　５月 26 日　金沢・大聖寺に大地震、藩邸内の土蔵倒壊

1820（文政　３）年　６月　８日　大聖寺川大洪水

1839（天保 10）年　９月　　凶作により年貢収納不能

1862（文久　３）年　５月 20 日　大聖寺川大洪水

大聖寺には熊坂谷断層が走っていて、記録によれば、111～112 年周期に大地震が起こっているといいます。1940（昭和 15）年に大聖寺沖地震（マグニチュード 7.0）が起きています。十分な備えが必要です。